

細胞検査士養成プログラム 先輩's voice



済生会西条病院
近藤 ゆめの さん

私は済生会西条病院に就職し、病理検査、一般検査、細菌検査、採血業務をローテーションで忙しく行っています。

病理検査は、婦人科検体の処理や鏡検、尿細胞診の鏡検も担当しています。婦人科検体は検診目的のものが多いため、陽性所見はそれほど多くありませんが、カンジダやトリコモナスなどの感染症を見落とさないよう、注意して鏡検を行っています。

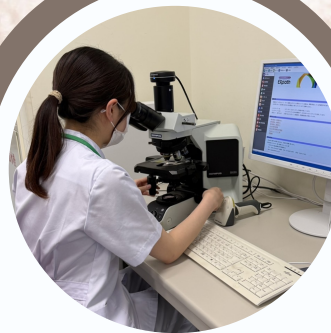
尿細胞診では、一般検査と同様に感染症や異型細胞の有無を確認しています。一般検査で行う尿沈渣はステルンハイマー（S）染色で鏡検を行うため、パパニコロウ染色とは見え方がやや異なりますが、細胞診で培った細胞所見の見方が役立ち、扁平上皮細胞、尿路上皮細胞、尿細管上皮細胞などをすぐに見分けられるようになりました。

大学院の2年間は学部卒の方に比べて就職が遅れるという面もありますが、それを上回る多くのメリットがあると感じています。実際に働くうえで役立つスキルを身につけることができ、大学院生活でのさまざまな経験が業務に大いに活かされています。

例えば、大学院時代にアルバイトで心電図検査を行っていた経験から、救急の心電図で呼ばれた際も落ち着いて対応できています。また、「心電図ができる新人」という理由で、健診の現場にも早い段階から選ばれて参加することができました。

さらに、研究で婦人科検体を用手法で処理していたことは、現在の病理検査業務にも非常に役立っています。

大学院に興味のある方には、ぜひ進学をおすすめします。きっと、将来の現場で自信を持って働くための力になると思います。



国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター
小田 千寛 さん

私は国立病院機構呉医療センター・中国がんセンターの病理診断科で勤務しています。

初めの2か月間は、当直業務の習得のため、検体検査（血液検査、生化学検査）・輸血検査での研修を行い、現在は主に病理診断科で業務を行っています。

病理診断科では、包埋、薄切、特殊・免疫染色、オペ材料の処理などの日常業務を行っており、細胞診では1stスクリーナーとして細胞診断にも関わらせていただいています。今まで教科書や参考書で学んだ症例の実際の標本に出会ったり、業務の合間に病理解剖が入ったりと新しい学びの連続であり、日々刺激を受けながら、充実した気持ちで業務に取り組んでいます。

最近では、腓FNAや耳鼻科・甲状腺・乳腺の穿刺吸引細胞診、CTガイド下生検などの迅速細胞診にも、1人で出向くようになりました。医師の方が穿刺吸引したシリンジと針を受け取り、素早く適切に標本作製し、その場で鏡検、そして病理医の先生に所見の報告を行うという一連の流れはとても緊張しますが、それと同時に大きなやりがいも感じています。

病院で働き始めて約2か月が経ちますが、早くも「大学院に進学して経験してよかった」と感じる場面が多くあります。例えば、大学院時代には授業や資格勉強、研究、論文作成など様々なことに優先順位をつけながら同時に進めていく忙しさや大変さがありましたが、その経験は、現在、病院でのマルチタスクへの順応にとっても役立っていると感じています。また、大学院在学中に全国学会で発表した経験が、新たな学会発表への挑戦にもつながり、自分自身のさらなるステップアップの機会を得ることができました。

振り返ってみると、大学院での経験は、自分が想像していた以上に現在の自分を支えてくれており、やりがいと将来への成長につながっていると実感しています。

大学院に少しでも興味を持っている方は、ぜひ気軽に先生方にお話だけでも伺ってみてください。